令和2年11月13日(金)

13日（金曜日）　柏市民新聞　（毎月第2、第4金曜日発行　平成3年9月25日第3種郵便物認可）　第1828号

顔顔顔

No.654

渡部 昭さん

ひかり隣保館 高齢者福祉と幼児保育に従事

社会福祉法人千葉県厚生事業団が運営する養護老人ホームひかり隣保館が1日に70周年を迎え、同2日に記念式典を同施設大広間で開いた。施設利用者が多数出席し、半世紀を超える福祉事業を称えた。渡部昭理事長は、「先達が貧困の時代から人間の尊厳を守ることに尽くしてきて今がある。その情熱を引き継ぎ、福祉に務めていきたい」とあいさつした。

隣保館は戦後間もない昭和25年、前身となる財団法人千葉県厚生事業協会が十余二の現在地に開設。当時復興が進む一方で、貧困に苦しむ高齢者や子育て世代も多く、養老事業（現在の養護老人ホーム）と母子寮、保育園を整備したのがはじまり。今も保育園は存続し、こちらも16日で70周年を迎える。

70周年を祝う式典が開かれた

今もなお、虐待や認知症など在宅で生活が困難な高齢者受け入れに積極的に取り組む。「ここが最後の砦のつもりで運営している。高齢者の権利を守り、安全安心な生活を送ってもらいたい」と施設長の佐藤高市さん。

70年にわたり、初志を貫く。利用者への福祉充実が評価され、昭和38、39年には天皇陛下から優良な福祉施設に下賜され る御下賜金を2年連続で拝受。現在も時代に応じ、特養老人ホームや訪問介護事業などにも取り組んでいる。

入居して23年目になる佐々木ミチコさん（88）は、九州から移り住んだ。「皆さん優しくてすごしやすい。友達もできた。ここにきてよかった」と話す。

設立から70年、40年ほど前から改修を繰り返すが、近年再び老朽化の課題が浮上。渡部理事長は「福祉はお金儲けではないので修繕には苦労するが、利用者の皆さんのために最善を尽くしたい」。佐藤さんも「灯を絶やさず70年。これをつなぎ、100年と利用者を支えるのが役目だ」。職員の士気も高く、掲げる「福祉の心」は一世紀の歴史を刻もうとしている。

70周年を迎えた養護老人ホームひかり隣保館を半世紀近く、陰日向になって支えた。「社会福祉法人とは黒子」「支えてきたのは、先人たちと地域の皆さん」。決して自身の功名は語らない。

生活相談員として昭和52年、41歳のときに赴任。30代でヨーロッパ研修に参加し、世界と日本の社会福祉の差を肌身に感じた。「どうして日本の福祉の現場は暗いのか」。答えを探すべく、ひかり隣保館で様々な事業を立ち上げた。「ホーム喫茶」と銘打ち、施設内で楽しくお茶する場所を作り、外出して好きな食事ができる「お好み外食」にも挑戦。今や当たり前の「笑顔溢れる」サービスだ。

高齢者福祉の先駆者

たたき上げの副施設長として、平成7年の特別養護老人ホーム建設に尽力。その後も、訪問介護事業に着手するなど、高齢化社会と向き合ってきた。「地域がボランティアとして支えてくれたから今がある」。

その陰には汗をかいた黒子の姿があった。多くの支援団体の名を挙げ感謝を口にするところに、「それだけの団体に声掛けし、理解を得るのはたいへんだったのでは」と問いをぶつけると、「いやいや、皆さんが応援してくれた。皆さんあってです」と力説する。黒子頭巾の前垂れには、誰にもみせない汗染みがあるに違いない。（社会福祉法人千葉県厚生事業団理事長　83歳　流山）

（元木）